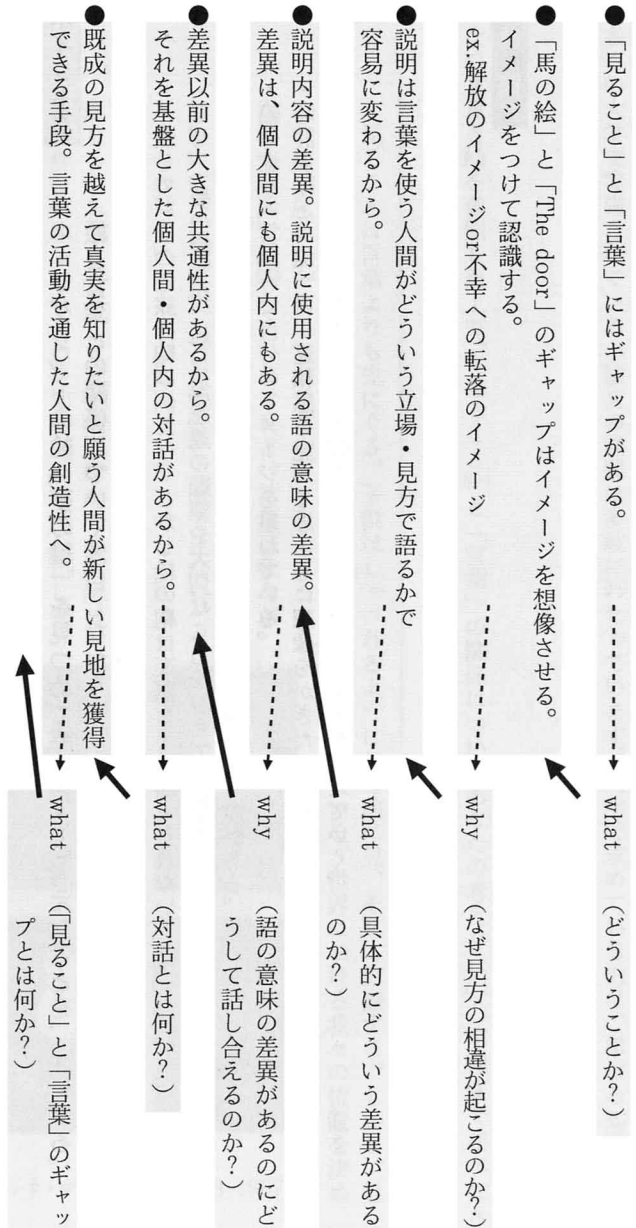


●歴史的経過	when (いつからそうなのか)	+if (それ以前はどうか)
●地理的状況	where (どこでそうなのか)	+if (他の場所ではどうか)
●立場・影響・損得	who (誰のためか・誰にとって)	+if (他の立場ならどうか)
●定義・現象・結果	what (どのようなか・なにか)	+if (本当にそういえるか)
●理由・原因・背景	why (なぜか・どうしてか)	+if (他の理由はないか)
●方法・対策	how (どのようにして)	+if (他の方法ではどうか)

◇思考のアプローチ◇
2W what / whyの繰り返し



「言葉」を用いる人間は、認識にすでに「言葉」の影響を受けている。しかし、「言葉」持たない「子供」が「見る」ような無心の状態がある以上、認識は相対的だ。真実を知りたいという人間の基本的な欲求がある限り、「見ること」と「言葉」のギャップは、永遠に認識の差異を起こす。それは言葉を変えれば「創造性につながるもの」と言ってもよい。だから、すでに起こってしまった事実は変えられないとしても、これから起こる事を変える力にはなるのだ。

- 序論……「見ること」と「言葉」との関係について
- 本論……具体例を用いた、「言葉」に存在するイメージや意味の変化の説明。
- 結論……事実に対する認識と説明の変化があるため、「見ること」とギャップを持つ「言葉」は逆に私たち